

古代の記憶：十日町の考古学

信濃川流域は、現在の十日町市を含む地域で、約 1 万年前に定住化が始まった。発掘調査の結果、日本の縄文時代（紀元前 14,000 年～400 年）の土器や石器が発見され、人間の居住地があったことを証明するとともに、雪国最古の住民の生活と文化を知る手がかりとなっている。

縄文時代は土器の発明によって定義され、多くの場合、手作業で形を整え、直火で焼いた単純な土器である。実際、縄文という名称は、これらの初期の土器の側面に刻まれた麻ひも模様のことを指している。弓矢とともに、土器の発明は人間の食生活を劇的に変化させ、縄文人はより多様な食べ物を調理できるようになった。例えば、火に安全な器は、生で食べると毒があったり、美味しくなかったりする山菜を茹でることを可能にした。

古代人の食生活についてわかっていることは、彼らが残した土器によるものがほとんどだ。日本の酸性土壌では、骨などの生物学的遺物はとくに溶けてしまっている。しかし、炭化した昔の食事の残骸が調理容器に付着しているため、かつて鍋で何を煮炊きしていたかを示す具体的な証拠となっている。

食生活が改善されるにつれて、縄文人の人口は急増した。約 5,500 年前から約 4,500 年前の中期には、信濃川流域の人口は 20 万人にも達した。火焰型土器（かえんがたどき）が出現したとされるのもこの時期である。

火焰型土器は新潟県特有の土器で、宗教的・儀礼的な用途があったと考えられている。いくつかの火焰式土器には、日常的なシンプルな調理器具のような焦げが見られるが、火焰型土器はそのデザインから壊れやすく、通常の調理には扱いにくかったと思われる。多くは、実用的でない高い側面と、突出した装飾を持つ大きく広がった口を持っている。そのデザインは多種多様だが、いくつかのモチーフ（渦巻きや S 字模様など）が頻繁に登場する。ニワトリはまだ日本に渡来していなかったが、鳥をかたどったものもある。土器の用途や文様の意味は謎のままだが、十日町の土壌から引き出された豊富な品々は、繁栄した複雑な古代文化の証拠である。

十日町市博物館には、土偶、石器、宝飾品、最古の火焰型土器など、この地域から発掘された 1000 点近い遺物が収蔵されている。そのうちの 57 点の出土品は国宝に指定されている。